

清少納言論

浪谷 侑大

(山崎ふさ子ゼミ)

はじめに

「春はあけぼの…」からはじまることで有名な日本3大随筆の一つである『枕草子』。

その著者である清少納言の少し変わった感性にひかれ、卒業論文という機会をつうじて彼女のこともっとよく知ろうと今回に至った。

さて、この清少納言論の構成について少し説明したい。この論は2部構成からなっている。

まず第1部では、清少納言はどのような人物であったか、親族の系図や彼女のまわりをとりまく人物達をふまえてみていきたい。

次に第2部では、彼女の代表作である『枕草子』のいく段かを抜粋し、訳しながら彼女の感性と日常の生活をみていきたい。

清少納言の人物像

清少納言(966年?~1025年?)は、平安時代の女流作家であり、『枕草子』の著者とされている。一条天皇の中宮(のち皇后)定子につかえ、女房としての役割をつとめた。

また歌人でもあり中古三十六歌仙にも数えられ、小倉百人一首に「夜をこめて 鳥のそら音は はかるとも よに逢坂の 関はゆるさじ」という有名な歌を残している。また『清少納言集』にも42首ほどの歌を残している。

清少納言という名は宮廷に出仕して女房としてつかえる立場になってから主人に与えられた名称で、本名は不明。江戸時代の学者、伊勢貞丈の著述といわれる(異説もある)『枕草紙抄』に、『女房名寄』からの引用とあって「なき子」「諾子」という名称も紹介されているが史料価値として疑問があり信用し兼ねる。(以上は 岸上慎二著『清少納言』吉川弘文館刊・人物叢書86 1頁5行目より引用)

清少納言は、「清」と「少納言」にわけること

ができ、「清」とは清原の略で彼女は清原氏出身であることを意味している。

そして「少納言」は男子貴族の官職名からきている。これは、『源氏物語』の作者である紫式部も同じであり、その式部は父の官名である。これは父、兄弟、夫などの官職名を利用しての当時の宮廷女房の命名法に従っており、赤染衛門や和泉式部も同一である。なので、少納言もこの法則にのっとっているはずであるが、近親者に少納言の官職をもつものが見当たらないので、その者に関する資料がほとんど残っていないと思われる。

ここで男官としての少納言の位がどのようなものであるかみてみたい。

男官としての少納言は『職原鈔』によると従五位下相当官で、蔵人所がおかれた嵯峨天皇以後はやや軽く鈴印等を掌るのみであったとされる。

また女房の地位があらわされている書物があり、その『女房官品』という書物の執柄家の条に、「下らふ。侍従、小辨、少納言などは下らふながら中らふかけたる名なり。」とある。女房中、下臈ではあるが、中臈に近い地位が彼女の身分のようである。

さてここで、清少納言の家族構成をみていきたいと思う。資料1に清原氏の簡単な系図が載っているので参考にみながら説明していきたいと思う。

まず、清少納言の父である清原元輔についてみていきたい。

清原元輔(908年~990年)は平安時代の歌人、学者として名高い人物である。清少納言とともに小倉百人一首に歌を残している。

また河内・肥後の国守を歴任し、980年3月、従五位上に至る。951年10月より、「梨壺の五人」の1人として『後撰和歌集』の編纂にあたった。家集『元輔集』があり、『拾遺和歌集』以下の勅撰集に入る。清少納言同様、中古三十六歌仙にも数えられた。父、元輔が歌人として高名だったこ

とは、『枕草子』のなかで、女房勤めしたときに清少納言が「父の名を辱めたくないで歌は詠まない」といって許されたという挿話からもわかる。

また元輔は、なかなかくれた性格の持ち主で、『今昔物語』には元輔のことについてこう書いてある。「歌詠元輔賀茂祭渡一条大路語第六」として説話がでており、元輔は賀茂祭の使として馬に乗り、一条大路を通行中、馬がつかずいたため路上に転倒し、冠を落としてしまった。そのとき、毛の薄い元輔の頭に夕日がさして輝いた。それを見た見物人は大笑いしたところ、落馬して冠を落とした人の例をあげて説教し、世人を笑わせたとされている。

次に清少納言の曾祖父である清原深養父^{ひかやぶ}についてみていきたい。

清原深養父(生没年不詳)は、清少納言の曾祖父にあたり、彼もまた中古三十六歌仙の1人で小倉百人一首に歌が残っている。

「夏の夜は まだ宵ながら あけぬるを 雲の
いづこに 月宿るらむ」とある。

彼は官職には恵まれず、908年の内匠允、930年の従五位下内蔵大允に終わったが、「古今和歌集」に17首の歌が入るなど、歌人としての評価は高かった。また、琴にもつうじていて、藤原兼輔・紀貫之・凡河内躬恒などと交流があった。紀貫之は、深養父の琴の音を聞き、歌を残している。「あしびきの 山下水は 行き通ひ 琴の音にさえ ながるべからず」。

晩年は洛北の岩倉に補陀落寺を建立し、隠居したとされる。

さて、清少納言に関する2人の人物を紹介したわけだが、資料1の系図にあるように清原氏のルーツには有名な天武天皇の名がかかっている。ここで少し清原氏と天武天皇の関係についてみていきたい。

そのためにまず天武天皇のことを簡単に触れておこうと思う。

天武天皇は兄の天智天皇と比較すると保守勢力に支援者が多かったようであるが、壬申の乱に勝利をおさめて、都を近江の大津宮から大和地方にとりもどされた方であり、位階・服制などについて政治機構の上に改革を加えられている。後年の『古事記』、『日本書紀』などの国史の編集の規模

も、この時期におかれたと、『古事記』の序文に記されている。

ではなぜ天皇家から清原氏として臣籍に降下したのだろうかというと、大和の清原は、天武天皇の皇居の地であり、『日本書紀』『古事記』『万葉集』によると、「飛鳥清御原宮御宇」と記してある。祖先の天皇の記念すべき皇居の地名であるので、その地名をとって氏の名を「清原」としたのであろうとされる。

清少納言は宮仕えをする以前に一度結婚をしている。相手は橘則光で結婚したのは天元4年(981)頃だと考えられている。則光の妻として、家庭の主婦として、一条天皇の中宮定子のところに宮仕えするまでの約12~13年ほどを過ごしたとされる。天元5年(982)には則長を生み、さらにその後、弟の李通を生んだのではないだろうかと考えられている。

結婚は則光が18歳で清少納言が17歳の頃とされている。お互い若くて結婚生活に満足していたはずであるが、離婚後の後年の状況で2人を観察するとそれほどうまくいってなかったのではないだろうかと考えられる。

則光は武勇にこそ秀でていたが和歌や文学的なものに対しての才に欠けるころがあったとされ、そういうところで清少納言とおりあいがつかなかったこともあったのではないだろうかと考えられている。

清少納言の主婦時代のエピソードとして有名な話の一つがあるので、話しておきたいと思う。

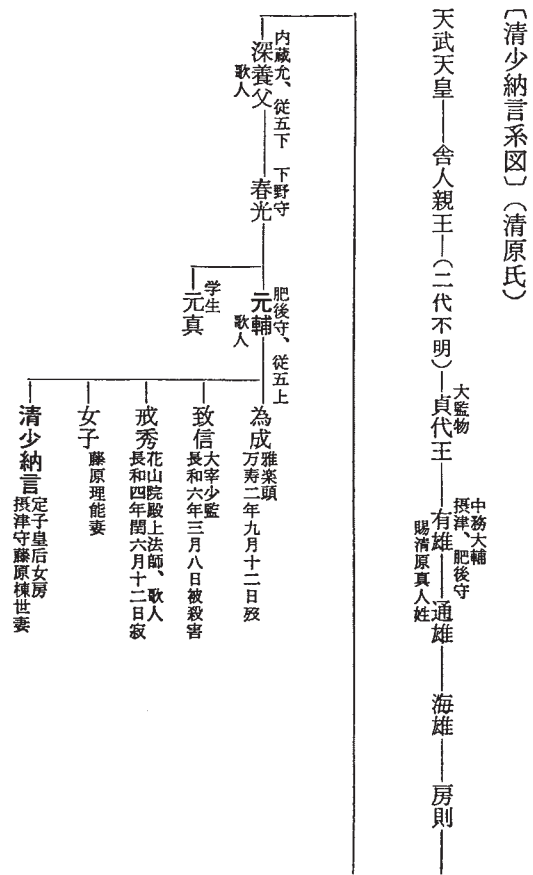
それは、花山天皇の寛和2年(986)6月のことであるが、北白河の大納言済時の別邸で、法華八講が行われ、左右大臣を除いたすべての上級貴族が集まった折の事である。清少納言はその時21歳でその法華八講を聴問に出かけている。この朝座の講師は有名な清範であった。清少納言はその講釈の終了とともに帰宅しようとするが、この八講の途中で退場するのを見た中納言義懐(花山天皇の叔父に当たる)が、「やままりぬるもよし」と、『法華経方便品』にある故事によって戯れて得意気な態度をしたのに対して、清少納言はすぐにその真意を悟って、——釈迦が説法をしようとした時に、五千人の増上慢が途中で席を立てて退出しようとした、そのとき、釈迦は「かくの如き

増上慢は退くも亦佳し」と言ったという故事——義懐が凡人風情でありながら、いかにも釈迦気どりでいっているのがおかしくて、「五千人のうちには入らせ給はぬやうあらじ」とやり返している。これはいかに頭の回転の早い応答であったとされている。

清少納言の出生についてだが、生没年は確実なことは分かっておらず、康保3年(966年)であったろうとされる説が一番有力である。だとすれば父元輔は当時59歳で、元輔のもっとも年老いてからの娘であった。

清少納言の母であるが史料が残っておらずほとんど不明である。

清少納言には兄弟がおり、現在確認できるのは兄が雅楽頭為成、大宰少監致信、花山院殿上法師戒秀、姉が藤原理能の妻とされている。長男為成とは20年ほど歳が離れていたであろうと考えられている。



系 図 (人物叢書『清少納言』による)

『枕草子』からみる清少納言の感性

清少納言の名がいまこれほどまでに知られているのは彼女の主要な作品である『枕草子』があるからである。『枕草子』は、「ものはづくし」(歌枕などの類聚)、詩歌秀句、日常の観察、個人のことや人々の噂、記録の性質を持つ回想など、彼女が平安の宮廷ですごした間に興味を持ったものすべてがまとめられている。

『枕草子』をすべて書き出すとはかなりの量になるので、今回は清少納言の日常の観察を中心に何段かピックアップしてみたいと思う。

まずはその冒頭の第一段を見ていきたい。

「春は、あけぼの。やうやう白くなりゆく山ぎは少し明りて紫だちたる雲の細くたなびきたる。

夏は、夜。月の頃はさらなり。闇もなほ。螢の多く飛び違ひたる。また、ただ一つ二つなど、ほのかにうち光りて行くもをかし。雨など降るもをかし。

秋は、夕暮。夕日のさして、山の端いと近うなりたるに、鳥の寝どころへ行くとして、三つ四つ、二つ三つなど、飛び急ぐさへあはれなり。まいて雁などの列ねたるがいと小さく見ゆるは、いとをかし。日入り果てて、風の音、虫の音など、はたいふべきにあらず。

冬は、つとめて。雪の降りたるはいふべきにもあらず。霜のいと白きも、またさらでも、いと寒きに、火など急ぎ熾して、炭もて渡るも、いとつきづきし。昼になりて、ぬるくゆるびもていけば、火桶の火も、白き灰がちになりて、わろし。」とある。

これを現代語訳にしてみると、

「春は、夜明け前がよい。だんだん白くなっていく山際が、少し明るくなり、紫がかつた雲が細くたなびいているのが風情がある。

夏は、夜がよい。満月の時期はとくにいい。また闇夜もいい。螢が多く飛びかっているのがよい。また、一匹、二匹と、かすかに光りながら螢が飛んでいくのも面白い。雨など降るのも情趣がある。

秋は、夕暮れ頃がよい。夕日がさして、山の端がとても近く見えているところに、からすが寝どころへ帰ろうとして、三羽四羽、二羽三羽などにまとまって、飛び急いでいる様子さえしみじみと

あわれを感じさせる。ましてや雁などが連なって飛んでいるのが大変小さく見えている様は、とても趣深い。日が沈みきって、風の音、虫の音など、聞こえてくるさまは、またいいようがない。

冬は、朝早い頃がよい。雪の降ったのはいうまでもない。霜のとても白いのも、またそうでなくても、とても寒いのに、急いで火をおこし、炭をもって通っていくのも、とても似つかわしい。昼になって、寒さがゆるんでくる頃には、火桶の火も、白く灰が多くなってしまい、あまり好感がもてない。」というようになる。

この章段を初めて読んだとき、私は彼女の感性にひかれた。現在の春夏秋冬と時季がずれているにせよ、だいたい一般的に春といえばサクラが美しいなどと書きそうなものだが、まったくそれにはふれず、自分自身が感じとった美しさをこんなところにこんな綺麗に感じるものを見つけたよ、聞いて聞いてと言わんばかりである。

春の暗闇から朝日がさしかかる瞬間の山際が綺麗で紫がかっているなどと私自身感じたことがない。また夏はホタルが多く飛び交っているのが美しいとあるが、これはいまでもそう感じる人は多いと思う。私も夏になればホタルがたくさんいるところを探し、風情を楽しんだが、ホタルが少なければすこしがっかりするし、またそう感じる人も多いと思う。

だが彼女はちがいが、ただ1匹2匹が飛び、ほのかに光っている様も面白いと感じる。

こうして見ていくと、私たちは誰かが綺麗だと言っているようなことを真似てそう言っているような風がある。誰かがこう言っていたからこれはきれいだ…など、どこかそういうところがないだろうか。だからなぜそこが綺麗と思ったのか、なぜそう感じるのかと聞かれると答えられないときがどこかあるだろう。

しかし彼女は、本当に綺麗だと、趣があると思ったところをそのまま書いているので、その一瞬を事細かに説明してくれている。まるで誰かがこれを見てその美しさを探するときの説明をしてくれているようなそんな感覚だと私は感じた。

つぎに三九段の「鳥は」をみていきたい。

「鳥は、異どころのものなれど、鸚鵡いとあは

れなり。人の言ふらむことをまねぶらむよ。

時鳥。水鶏。鳴。都鳥。鶺鴒。ひたき。

山鳥。友を恋ひて、鏡を見すれば慰むらむ、心稚ういとあはれなり。

谷隔てたる程など、心苦し。鶴は、いとちたき様なれど、鳴く声雲居まで聞こゆるいとめでたし。頭赤き雀。斑鳩の雄鳥。たくみ鳥。

鶯は、いと見日も見苦し。眼居なども、うたてよろづになつかしからねど、「ゆるぎの森に一人は寝じ」と争ふらむ、をかし。

水鳥。鶯鶯いとあはれなり。片身に居かはりて、羽の上の霜払ふらむ程など。千鳥、いとをかし。

鶯は、文などにもめでたきものに作り、声よりはじめて様かたちもさばかりあてにうつくしき程よりは、九重の内に鳴かぬぞいとわろき。

人の、「さなむある」と言ひしを、「さしもあらじ」と思ひしに、十年ばかりさぶらひて聞きしに、まことに、さらに音せざりき。さるは、竹近き紅梅もいとよく通ひぬべきたよりなりかし。

まかでて聞けば、あやしき家の、見所もなき梅の木などには、かしがましきまでぞ鳴く。

夜鳴かぬも睡汚なき心地すれども、今はいかかかせむ。夏秋の末まで老い声に鳴きて、「虫喰ひ」など、良うもあらぬ者は、名をつかけあて言ふぞくちをしく、くすしき心地する。

それも、ただ雀などのやうに常にある鳥ならば、さもおほゆまじ。春鳴くゆゑこそはあらめ。

「年立ちかへる」など、をかしきことに、歌にも文にも作るなるは。なほ、春のうち鳴かましかば、いかにをかしからまし。人をも、人げなう、世の覚え悔らはしうなりそめにたるをば誇りやはする。

鶯、鳥などのうへは見入れ聞き入れなどする人、世になしかし。されば、いみじかるべきものとなりたればと思ふに、心ゆかぬ心地するなり。

祭の還さ見るとて、雲林院、知足院などの前に車を立てたれば、時鳥も忍ばぬにやあらむ、鳴くに、いとようまねび似せて、木高き木どもの中に、諸声に鳴きたるこそさすがにをかしけれ。

時鳥は、なほさらに言ふべき方なし。いつしかしたり顔にも聞こえたるに、卯の花、花橘などに宿りをしてはた隠れたるも、妬げなる心ばへなり。五月雨の、短き夜に寝覚めをして、いかで人より

さきに聞かむと待たれて、夜深くうち出でたる声のうらうらうじう愛敬づきたる、いみじう心あくがれ、せむ方なし。

六月になりぬれば、音もせずなりぬる、すべて言ふもおろかなり。夜鳴くもの、何も何もめでたし。乳児どものみぞ、さしもなき。」とある。次に現代語訳で見てみよう。

「鳥は、異国のものだけれどもオウムがたいそうけなげな鳥だ。人の言葉をそっくり真似するというではないか。ホトトギス、クイナ、しぎ、都鳥、ひわ、ひたき。

山鳥は、仲間を恋しがって、鏡を見せると、映った自分の姿を仲間だと思って安心するそうだが、そのウブなところが、とても趣を感じさせる。また、雌と雄が、谷を隔てて夜眠るというのも、気の毒で可愛そうだ。

ツルは、おおげさで目に立つ姿の鳥だが、鳴く声が天まで届くというのはすばらしい。頭の赤い雀。斑鳩の美しい雄鳥。ミソサザイ。

サギは、見た目もひどく不格好だ。あのギョロリとしたメダマなども嫌な感じで、何から何まで優しさというものを感じさせない鳥だが、そのくせ、『(ゆるぎの森に) 独り寝はしない』と言って、妻争いをするというのが、おもしろい。

水鳥の中では、オシドリが、人情味豊かな鳥だ。夜、雌雄お互いにかわり合っては、羽根の上に白く置いた霜を払うというところなど。千鳥はとても風情のある鳥だ。

ウグイスは、詩などにも、素晴らしい鳥として歌われ、鳴き声をはじめとして、姿も顔つきもあんなに上品で可愛らしいのに、宮中に来て鳴かないというのは、あまりいいとはいえない。ある人が、『宮中では鳴かない』と言ったのを、私は、まさか、とその時思ったけれど、その後、十年ほど、宮中にお仕えして注意をしていたが、本当に全然ウグイスの鳴き声は聞かなかった。しかし、宮中には竹の近くに紅梅があったりして、飛んできて鳴くにはうってつけの場所であるというのに。宮中を退出して聞くと、みすばらしい家の、貧弱な梅の木などにはうるさいほど鳴いている。また、夜鳴かないのも、眠たがり屋のようでみっともないと思われるけれども、これは生まれつきだから文句のつけようもない。夏・秋の終わりごろまで、

年寄りくさい声で鳴いていて、そのころは、「虫食い」などと、下々の者によくはない名前と呼ばれている。その融通の利かなさがはなはだ情けない。それも、雀などのようにいつもそこいらにいるといった鳥ならば、そんなふうに思われることはないだろう。ウグイスは春鳴く鳥だからなのだ。『あらたまの年たちかえるその朝からもう、待ち遠しいものはウグイスの声だ』などと、新春を告げる風情ある鳥として、歌にも詩にも歌われているではないか。言えは愚痴にもなるうが、春のうちだけ鳴くのならば、ウグイスはどんなにか素晴らしからろう。人間だって、落ちぶれて、世間からも見下げられるようになった人を、いまさら非難するといったことがあろうか。鳶とかカラスとか好かれないものと決まっている手合いには、多少の注意を払うといった人もいないではないか。だから、ウグイスは、もう素晴らしいものということに相場が決まった鳥なのだからと思うと、いつまでも鳴いているウグイスの気が知れない。祭りの帰りの見物で、紫野の雲林院や知足院などの前に車を立てて待っているとホトトギスも、もうこのころになると我慢しきれないといった風情で鳴く。すると、ウグイスがその声をそっくりうまく真似て、あの辺の小高い立ち木の茂みの中で声をそろえて鳴くのは、これはさすがに、捨てがたい風情がある。

ホトトギスの風情の良さは、いまさらいうまでもない。いつの間にか、その鳴き声も堂に入って自信にみちた調子になり、卯の花や花橘などに好んでとまり、その姿を見え隠れさせるのも、まったく心憎い風流さだ。五月雨のころの短夜に、目を覚まして、なんとかして人より先にその声を聞こうと待ち遠しく思ううちに、明け方の闇の彼方に鳴いたその声の巧みさ、かわいらしさというものは、魂もそちらにさまよい出るかとおもわれるほど、きもちが惹かれてどうしようもない。六月に入ると、もうバッタリ鳴かなくなるのも、何から何まで、一通りの形容では言い尽くせない素晴らしさだ。大体夜鳴くものは、なんでも、素晴らしい。ただ赤ん坊だけは、そうでもないが…。』というはなしである。

知識、教養があつてこそこういうものの考え方ができるのかかわからないが、一つ一つ鳥達のい

いところや悪いところを人間に置き換えたように説明してくれる話し方が本当に面白いとわたしは感じる。

次は、第七段の「上にさぶらふ御猫は」をみていきたい。

「上にさぶらふ御猫は、かうぶりにて、『命婦のおとど』とて、いみじうをかしければ、かしづかせ給ふが、端に出でて臥したるに、乳母の馬命婦、『あな、まさなや。入り給へ』と呼ぶに、日の射し入りたるに、眠りて居たるを、おどすとて、『翁丸いづら。命婦のおとど食へ』と言ふに、まことかとして、痴れ者は走りかかれば、おびえまどひて、御簾の内に入りぬ。朝餉の御前に、上おはしますに、ご覧じて、いみじうおどろかせ給ふ。猫を御懐に入れさせ給ひて、男ども召せば、蔵人忠隆、なりなか参りたれば、『この翁丸打ち調じて、犬鳥へつかはせ。ただいま』と仰せらるれば、集まり狩り騒ぐ。馬命婦をもさいなみて、『乳母替へてむ。いとうしろめたし』と仰せらるれば、御前にも出でず。犬は狩り出でて、滝口などして、追ひつかはしつ。『あはれ。いみじうゆるぎ歩きつるものを』『三月三日、頭弁の、柳葛せさせ、桃の花を挿頭にささせ、桜腰に差しなどして、歩かせ給ひし折、かかる目見むとは思はざりけむ』など、あはれがる。『御膳の折は、必ず向かひさぶらふに、さうごうしうこそあれ』など言ひて、三四日になりぬる昼つ方、犬いみじう鳴く声のすれば、何ぞの犬の、かく久しう鳴くにかあらむと聞くに、万づの犬、とぶらひ見に行く。御廁人なる者走り来て、『あな、いみじ。犬を蔵人二人して打ち給ふ。死ぬべし。犬を流させ給ひけるが、帰り参りたるとて、調じ給ふ』と言ふ。心憂のことや。翁丸なり。『忠隆、実房など打つ』と言へば、制しにやる程に、からうじて鳴き止み、『死にければ、陣の外に引き棄てつ』と言へば、あはれがりなどする夕つ方、いみじげに腫れ、あさましげなる犬の、わびしげなるが、わななき歩けば、『翁丸か。この頃、かかる犬やは歩く』と言ふに、『翁丸』と言へど、聞きも入れず。『それ』とも言ひ、『あえず』とも口々申せば、『右近ぞ見知りたる。呼べ』とて召せば、参りたり。

『これは翁丸か』と、見せさせ給ふ。『似ては侍れど、これはゆゆしげにこそ侍るめれ。また、翁丸かとだに言へば、よろこびてまうで来るものを、呼べど寄り来ず。あらぬなめり。それは、打ち殺して棄て侍りぬとこそ申しつれ。二人して打たむには、侍りなむや』など申せば、心憂がらせ給ふ。暗うなりて、物食はせたれど、食はねば、あらぬものに言ひなして止みぬるつとめて、御けづり髪、御手水など参りて、御鏡を持たせさせ給ひて御覧ずれば、げに、犬の柱基に居たるを見やりて、『あはれ。昨日翁丸をいみじうも打ちしかな。死にけむこそあはれなれ。何の身に、このたびはなりぬらむ。いかにわびしき心地しけむ』とうち言ふに、この居たる犬の震ひわななきで、涙をただ落とすに落とすに、いとあさましきは、翁丸にこそはありけれ。『昨夜は隠れ忍びてあるなりけり』と、あはれに添へて、をかしきこと限りなし。御鏡うち置きて、『さは、翁丸か』と言ふに、ひれ伏して、いみじう鳴く。御前にも、いみじうおぢ笑はせ給ふ。右近内侍召して、『かくなむ』と仰せらるれば、笑ひののしるを、上にも聞こしめして、渡りおはしましたり。『あさましう。犬なども、かかる心あるものなりけり』と、笑はせ給ふ。上の女房なども聞きて、参り集まりて、呼ぶにも今ぞ立ち動く。『なほ、この顔などの腫れたる。物の手をせさせばや』と言へば、『つひにこれを言ひ露はしつること』など笑ふに、忠隆聞きて、台盤所の方より、『さとにや侍らむ。かれ見侍らむ』と言ひたれば、『あなゆゆし。さらにさるものなし』と言はすれば、『さりとも、見つくる折も侍らむ。さのみもえ隠させ給はじ』と言ふ。さて、かしこまり許されて、もとのやうになりなき。なほ、あはれがられて、震ひ鳴き出でたりしこそ、世に知らず、をかしくあはれなりしか。人など、人に言はれて、泣きなどはすれ。

これを現代語訳してみる。

「帝ご寵愛の猫は、五位の位を頂いて『命婦のおもと』と呼ばれて、ひどくかわいらしいので、帝もなでいつくしんでおられる。ある日その猫が、縁側に出て寝ているので、この猫のお世話係の馬の命婦が、『お行儀の悪い。おはいりなさい』と呼ぶけれども、日向ぼっこを決め込んで眠っているのを、びっくりさせてやろうというつもりで、

『翁丸はどこ？、命婦のおもとをこらしめておやり』と言うと、冗談とは知らず、犬の翁丸が飛びついたので、猫はおびえて、あわてふためいて御簾の中へ逃げ込んだ。

ちょうど近くに帝がいらしたときで、この様子を目撃され、ことのほかびっくりあそばされる。猫を懐においれあそばして、蔵人を呼ばれ、忠隆となりなが御前に参上すると、『不屈き者の翁丸を打ち懲らし、犬烏へ流罪にせよ。即刻』と命令され、人々が集まって、翁丸召し取りという騒ぎになった。帝は馬の命婦をもきつくおしかりになって、『世話係を他の者に代えよう。こんなことでは安心して任せておけない。』とおっしゃるので、馬の命婦は、御不興を恐れて御前に顔出しもしない。犬は追い回して捕え、滝口の武士などによって御所から追放ということになった。『ほんにかわいそうに。威張った顔してのし歩いていたのに。三月三日に、頭の弁が柳で頭を飾らせ、桃の花をくびにささせ、桜を腰に差したりして飾り立てて練り歩かせなされた時には、こんな目に合うとは予想もしなかったろうに』などと、私たちはみな同情した。『中宮のお食事のときには、お余りを頂戴しようと、決まって庭先でこちらを向いて待っていたものだったのに、さびしくなりましたこと』など噂し合っていたが、三、四日も経っただろうか、ちょうどお昼頃、犬のけたたましく鳴く声があるので、どんな犬が鳴き続けるのだろうかと思ううち、御所中の犬が様子を見にそちらにかけていく。と、下仕えの女がバタバタかけてきて、『まあ、大変でございます。犬を蔵人お二人で打っていらっしゃる。きっと死んでしまいます。追放なされた犬が帰ってきたというので、懲らしめていらっしゃるのです』という報告。まあ嫌な知らせ、やはり翁丸だったのだ。『忠隆、実房などが打っている』という話なので、すぐに、その女を止めに走らせるとやっと鳴き声がやんだが、『死んだので、御門の外に放り捨てました』と帰ってきて言うので、可哀想などと話し合ったことだった。その夕方、ひどい様子にはれ上がり、二目と見られないみすばらしい姿の犬が、苦しそうにヒョロヒョロとその辺をうろついているので、私が『翁丸かしら。最近、こんな犬を見たことはないわ』というと、誰かが『翁丸』と声を

かけたが見向きもしない。『やっぱり翁丸よ』という女房もあれば、『いや違う』という意見も出て、まとまりがつかないので、中宮様が『右近なら鑑定がつこう。呼んでおいで』ということになって、お呼び出しになったので、右近が参上した。『これは果たして翁丸か、どうか』とおっしゃって、右近に検分をおさせになる。『似てはおりますけれども、これはどうもあんまりみすばらし過ぎるようでございます。それに翁丸と呼びさえすれば、喜んで飛んできますのに、これは、呼んでもやってきません。どうも違うようでございます。翁丸は打ち殺して、死骸は取り捨てましたという蔵人からの報告でした。犬の男が二人がかりで打ったのでは、とても命はもちますまい』などと申し上げるので、中宮は眉をひそめて、まあひどいことをしたものだ、というご様子である。日もとっぷりくってから、食べ物をやったけれども食べないので、私たちは、これは違う犬だということにして問題にケリをつけた。その翌朝、中宮が御髪をくしけずったり、御洗面など、朝の身じまいをなさる時、お鏡を私にお持たせになって御覧になるので、おそばにお付きしていたが、昨夜の犬が、お庭先の縁の柱の所にうずくまっているのを眺めやって、『かわいそうに。昨日、翁丸をひどく打ったことよ。死んでしまったそうだが、可哀想なことをしたものだ。今度は、いったい何に生まれ変わったことでしょうか。どんなにか辛かったろう』と、思わず口にするので、そこにうずくまっていた犬が、ぶるぶる体を震わせて、ぼたぼた涙を落したのでもうびっくりしてしまった。さては、やっぱり翁丸だったのだ。昨夜は我が身の素性をひた隠しにしていたのだと思うと、そのけなげさ、あわれさもさることながら、犬のくせによくもそこまで考えたものよと、その頭の良さが、何ともいえず面白い。思わずお鏡を下において、『それなら、やっぱり翁丸か』というと、地にひれ伏して、鳴き声をたてる。中宮も、ほっとされたようで、たいそうお笑いになる。早速、右近の内侍をお呼びになって、これこれと説明すると、居合わせた女房たちも、大笑いする。その騒ぎを帝もお聞きになって、中宮の御在所へお出ましになった。『なんと、犬でも、これほどの分別があるものなのだね』とおっしゃって、お笑いになる。帝付き

の女房なども噂を聞いてことらに集まってきて名前を呼んだりするが、それに対しても、今となると活発に立ち上がって身動きする。私が、『顔なんかはれ上がってひどいこと。何とか手当をさせたいものだわ』というと、『それにしてもあなたは、とうとう翁丸の正体を見あらわしてしまったわね。』などと言って笑っているところに、蔵人の忠隆が聞きつけて、裏の台盤所のほうから、『翁丸が帰ってきたとは本当でしょうか。検分いたしましょう。』と申し入れてきたので、私が、『まあ、めっそうもない。絶対に、そんなものはおりません』と、とりつぎの者に言わせると、忠隆は、『そんなことおっしゃっても、いつかは私が見つけますよ。かくし通せるものではありませんよ』などと言う。

こうしたいきさつで、許され、翁丸はもとの身の上になったのだった。それにしても、憐れみの言葉をかけられて、身を振るわせて鳴き声をたてた様子といったら、利口というか、いじらしいというか、無上の感動だった。人に同情の言葉をかけられて泣いたりするのは、人間くらいのものだと思っていたのに…」という訳になる。

私が読んですばらしいと感じた『枕草子』の章段を三つあげてみたが、清少納言という人物はこういうおもしろおかしい日常の話に自分の感じたこと、風情があると感じたことを終始ずっと書いている。今回はページの制限もあるのでとりあげるお話に限られたが、いちど興味を持ってくれた人は『枕草子』を読んでもらいたい。なるほど、清少納言はこう考えるんだなあと感じるところがでてくると思う。私自身がそうであったので。

あとがき

清少納言が中宮・定子のお世話係をしていた時代、いまの時代とは見えるものもかなり違っていたと思うが、人の心だけはいつの世もかわらずあるものなんだなあとの「清少納言論」を通じて学んだ。短いがこれをあとがきということにさせていただきます。

参考文献

『鑑賞日本古典文学 第8巻 枕草子』 石田穰
二編 1981年 角川書店刊

『人物叢書第86巻 清少納言』 岸上慎二著 1987年 吉川弘文館刊

『～古典を読む～第12巻 枕草子』 寺田透著
1984年 岩波書店刊

『新日本古典文学大系 第25巻 枕草子』 渡辺
実校注 1991年 岩波書店刊